高　等　学　校

平成２３年度

教育研究員研究報告書

国　　語

東京都教育委員会

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅱ　研究の視点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

Ⅲ　研究の仮説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

Ⅳ　研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

Ⅴ　研究の内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

Ⅵ　研究の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18

Ⅶ　今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

研究主題	「意見の交流を通じて自分の考えを深め、根拠を明確にして表現する力を高める授業の在り方について」

Ⅰ　研究主題設定の理由

1　社会の現状

平成２０年１月、中央教育審議会総会でまとめられた「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善について（答申）」、平成２２年６月に示された「高等学校学習指導要領解説国語編」では、２１世紀を迎えた現代社会を「知識基盤社会」の時代としている。そして、このような社会の特徴を次の４点示している。

① 知識には国境がなく、グローバル化が一層進む。

② 知識は日進月歩であり、競争と技術革新が絶え間なく生まれる。

③ 知識の進展は旧来のパラダイム転換を伴うことが多く、幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が一層重要になる。

④ 性別や年齢を問わず参画することが促進される。

現代社会は、国際化、情報化の進展に伴い、生活環境、言語環境、価値観が急速に多様化する社会である。そして、その変化の中で新しい情報や技術が社会のあらゆる領域での活動の基盤となる知識・技能として重要性を増し、知的財産や人材をめぐる競争が地球的な規模で行われる社会である。

このようにグローバル化した社会においては、文化的・感覚的には理解し合うことが困難であることを前提として、自分の考えや意見を相手に伝えるコミュニケーション技術が必要となる。したがって、文化の異なる相手の考えを理解し、自分の考えを表現し、自分の主張を認めさせるために語学力は最低限必要な技能の一つであるが、それだけでは不十分である。

前述の中教審答申の外国語に関する記述の中で「社会や経済のグローバル化の急速な進展に伴い、単に受信した外国語を理解することにとどまらず、コミュニケーションの中で自らの考えなどを相手に伝えるための『発信力』の育成がより重要となっている。」と述べられている。つまり、身に付けた外国語という道具を使って伝えたい自己の考えをもち、文化の違いを越えて自己の考えが伝わるように論理的に表現する力が重要である。また、このような表現がまず母語でできる必要がある。したがって、母語で思考・判断・表現する力は、現代社会における必須の力であり、コミュニケーション能力の基礎的・基本的技能なのである。

これらの現状を踏まえて、次代を担う人材を育成するに当たって、国語が果たすべき役割を考えた。

2　生徒の現状

平成２２年６月の「高等学校学習指導要領解説国語編」によると、児童生徒の状況について、学習指導要領改訂の背景として、ＯＥＣＤ（経済協力開発機構）のＰＩＳＡ調査など各種調査では、次のような点に課題があると分析されている。

① 思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題、知識・技能を活用する問題に課題がある。

② 読解力で成績分布の分散が拡大しており、その背景には家庭での学習時間などの学習意欲、学習習慣・生活習慣に課題がある。

③ 自分への自信の欠如や自らの将来への不安、体力の低下といった課題がある。

また、私たちが日常目にする「模範解答を強く求める」、「解答例が示されるまでノートやワークシートに何も記述しない」、「板書されたままにノートに書き写すことにこだわる」といった生徒の姿に、自分で思考し判断し表現（解答）するのではなく、模範解答や解答例を知識として暗記し、暗記した知識のみで解答しようとする姿勢がうかがえる。

このような生徒の状況について、前述の中教審答申に、次のように背景が述べられている。

「各教科においては、（中略）知識・技能を活用する学習活動については指導や成績評価が難しいこともあって、これらの学習活動の意義が理解されず、十分に行われているとは言いがたい。そのため、（中略）学校の教育活動全体を通じて、我が国の子どもたちの思考力・判断力・表現力等が十分に育成されていないことの原因となっている。」

つまり、これまで知識を増やす学習に重点が置かれ、身に付けた知識・技能を活用し、定着させる学習の機会が十分ではなかったとことがその背景にあるものと考えられる。

3 主題設定の理由

今年度の研究員全体テーマ「新学習指導要領に対応した授業の在り方について」を受けた高等学校部会のテーマは「思考力・判断力・表現力の育成を図るための授業等についての実践研究」である。何かを「思考」し、「判断」し、「表現」するためには言語の運用能力が欠かせない。言語を基盤とする人間の活動には、論理的思考といった知的活動、人と人とが「伝え合う」ためのコミュニケーション、感情的・情緒的な活動などがあるが、中でも知的活動である論理的思考の弱さは日々生徒と接する現場の中でも特に危惧されるものである。

携帯電話や、インターネット等の新たなコミュニケーションツールの普及は誰もが手軽に情報の発信者となることを可能とした。しかし、同時に自らの直感的な思いを整理、吟味することなく「書き」、「話す」経験ばかりを増大させることにもなっている。

ＰＩＳＡ調査によれば、日本の子供たちは、基礎的・基本的知識・技能や情報を取り出す能力は高い。一方、それらを結び付け、筋道立てて考え、根拠に基づいて結論を出し、根拠を示して説明するという思考・判断・表現のプロセスを経た解答や意見を表出させる能力は十分とは言えない。そこで、私たちは、身に付けた知識・技能を活用し、思考・判断・表現のプロセスを経た解答・意見の表明を行う学習活動を意図的・計画的に行うことが重要だと考えた。

また、本研究において、生徒の思考・判断・表現の過程やその力の変容を検証するためには、最終的に表現されたものが思考・判断の過程を反映し検証可能である必要がある。よって、生徒が論理的に思考し、様々な点を考慮しながら論理的に判断し、思考・判断の基となった論理に基づいて表現する学習活動を設定する必要があると考えた。さらに、思考力・判断力を高めるために、それぞれの過程において、自己の考えや意見を他者との関係の中で深め、客観性や説得力を高める機会を十分に設定する必要があると考えた。

以上のことから、本部会では「意見の交流を通じて自分の考えを深め、根拠を明確にして表現する力を高める授業の在り方について」を研究主題とし、研究を進めることとした。

Ⅱ　研究の視点

1　「生きる力」の基盤をなす言語の運用能力

今回の学習指導要領改訂においては「生きる力」の育成という理念自体は引き継がれている。また、「生きる力」を支える「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の調和という考え方も引き継がれている。

一方、教育基本法及び学校教育法の改正によって、「学力」については、①基礎的・基本的な知識・技能の習得、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、③主体的に学習に取り組む態度の三つの要素に基づく力であることが定義された。

新しい「高等学校学習指導要領解説国語編」では、これらの学力観に基き、基礎的・基本的な知識・技能の上にこれらを育むには知識・技能の活用を図る学習活動の充実とともに、これらの学習活動の基盤となる言語に関する能力の育成のために、国語科では小学校、中学校及び高等学校を通じて、言語教育としての立場を一層重視するという前提に基づき、小学校低・中学年からその基本となる力を定着させる必要があると指摘している。

また、中教審答申の小学校、中学校及び高等学校における国語の改善の基本方針の中には、「言葉を通して的確に理解し、論理的に思考し表現する能力、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成すること」を重視すると示されている。

以上を踏まえた小学校・中学校での発達段階に応じた指導を受け、高等学校に入学してきた子供たちに身に付けさせるべき「思考力・判断力・表現力」について、高等学校国語部会では次のように定義した。

① 「思考力」とは、言語を手掛かりとしながら物事を筋道立てて考える力である。

② 「判断力」とは根拠に基づいて物事を比較・選択し、自ら結論を出す力である。

③ 「表現力」とは内容や目的に応じてふさわしい語句を用い、根拠を明らかにしながら自分の考えを表す力である。

2　主題設定の視点

まず、新しい「高等学校学習指導要領」国語科の目標の中で示された「思考力や想像力を伸ばす」という部分に注目した。解説によれば、「思考力を伸ばすとは、物事の筋道が分かるという段階から更に進んで、問題を解決しようとする創造的かつ論理的な思考力を身に付けることである」とあり、「想像力を伸ばすとは、実際に見たり経験したりしていない事柄などを頭の中に思い描く段階から更に進んで、様々な資料を基に、これから起こるであろうことやどのように行動すればよいのかということを思い描くなど、将来の状況やあるべき姿を予測したり、見通しをもって行動したりすることの能力までを含めて身に付けることである。」となっている。

つまり、高等学校段階における「想像力」には、心情的な側面のみならず、根拠に基づき先を見通すなど論理的な側面があり、両者を一層発展させる必要があることが明示されていることになる。また、教育課程実施状況調査においては、比較的自由に自分の気持ちを表現する設問は正答率が上昇しているのに対し、文章を深く読んで分析的に理解してその上で論理的に記述する設問では正答率が低下しているという現状もある。

これらから共通して得られるのは「論理性」を重視する必要があるということである。言い換えれば、高等学校国語科では言語を通して、「論理的に思考し」「判断し」「表現する」力を育成することが求められているということである。今回、高等学校国語部会では、根拠を明確にし、筋道立てて思考し、判断した成果を自らの考えとして述べることを論理的であるための初期条件として設定し、その能力育成のための具体的な指導法を探ることとした。

Ⅲ　研究の仮説

1　仮説設定の方向性

「Ⅱ　研究の視点」に基づき、「研究の仮説」について次のような方向性を設定した。

① 自分の考えを深め論理的に思考するために、根拠やその裏付け及び具体例に基づき論理的に構成した論拠、また、自分の考えの立脚点である理由などを明確にして表現する力を高めることができる授業の在り方を工夫する。

② 論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめるという指導事項にふさわしい言語活動を設定する。

③ 生徒の学習意欲を喚起し、生徒が積極的・主体的に学習活動を行えるよう、課題やテーマ、教材等の設定または選定などを工夫する。

2　仮説の設定

上記の方向性により次のような仮説を設定した。

① 自分の考えについて、根拠や論拠、理由を明確にする学習活動を設定することによって、筋道を立てて考え、根拠に基づいて結論を出す力を高めることができる。

② 自分の考えや根拠に対して他者からの批評を受けることによって、自分の考えを深め、出した結論について根拠を示して表現する力を高めることができる。

Ⅳ　研究の方法

1　研究の方法

研究主題に即して、授業の具体的な在り方に関する実践的研究を行う。

仮説に関する具体的方策について部員が各高等学校における実践等を持ち寄るとともに、合宿等での集中討議を活用して検証授業の指導案を作成する。指導案の作成については、次のような観点で検討した。

① 表現活動によって示された内容によって、思考・判断の過程を検証する。

② 生徒の変容を検証するために、単元の初めと終わりに同じ内容の表現活動を行う。

③ 思考・判断の活動の中に、意見の交流の機会を十分に確保し、根拠の必要性を体験的に理解できるような学習活動を行う。

このような観点で作成された指導案を基に検証授業（実践事例）を行い、本単元を終えた生徒たちの感想と授業者による活動の様子の観察やワークシートの分析から検証授業及び本研究における成果と課題をまとめる。

2　具体的方策

(1)　指導事項

表現されたもので生徒の変容を検証するため、新学習指導要領「国語総合」の「B　書くこと」の指導事項「イ　論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめること。」から単元の構成を工夫することとした。

また、以下に示す方法１～３については、「B　書くこと」の言語活動例「イ　出典を明示して文章や図表などを引用し、説明や意見などを書くこと。」に基づく言語活動を行うことを想定した。しかし、本研究では、「自分の考えについて、根拠や論拠、理由を明確にする学習活動を設定することによって、筋道を立てて考え、根拠に基づいて結論を出す力を高めることができる。」という仮設を設定しているため、「出典を明示して文章や図表などを引用」する活動に限定するより、「論理の構成や展開を工夫」して書くことを重要視した方がよいと考えた。そこで、「出典を明示して文章や図表などを引用し」を「優れた表現に触れ、その構造や構成を自己の文に取り入れることによって」に置き換えて、自分の考えを文章にまとめさせることとした。

(2)　方法１

グループワークや発表活動などの言語活動を充実させることを通して、根拠や論拠、理由を明確にしながら思考・判断・表現する学習の機会を設定する。

具体的には、グループワークを各時間に取り入れ、グループ内での発表やクラス内での発表をさせることで、根拠を明確にしながら発信し合う力が高められるようにした。

(3)　方法２

論理的な文章の構成や展開を確かめ、自分の表現に役立てる学習活動を取り入れる。

具体的には、文章を読み、その文章の構成や展開を確かめさせるとともに、説得力のある文章を書く一つの方法として、本研究では論理的な文章の構成や展開を模倣して文章を書かせることができるようにした。

(4)　方法３

様々な視点から意見を出し合えるような題材について、根拠や論拠、理由を明確にしながら思考・判断・表現する学習活動を展開する。

具体的には、根拠を明確にしながら自分の意見を表現し、より説得力のある意見を述べるための課題探究型の学習活動を設定した。

(5)　教材

上記（２）、（３）、（４）の方法で実践するに当たって、教材については次のような観点で選定、提示することとした。

論理的な文章の構成や展開が確かめられたり、様々な考え方の下に、根拠や論拠、理由を明確にすることができたりするような教材の選定や資料提示を行う。

具体的には、教科書教材「水の東西」を使用することとした。文章の構成や展開を確かめさせ、対比の構造を模倣しながら自分の表現に役立てることができるようにする。また、多様な解答ができるワークシートを用意した。

V　研究の内容

1　研究構想

全体テーマ　**新学習指導要領に対応した授業の在り方について**

高校部会テーマ　**思考力・判断力・表現力の育成を図るための授業等についての実践研究**

教科等における「思考力・判断力・表現力」の定義

思考力：言語を手掛かりとしながら物事を筋道立てて考える力

判断力：根拠に基づいて物事を比較・選択し、自ら結論を出す力

表現力：内容や目的に応じてふさわしい語句を用い、根拠を明らかにしながら自分の考えを表す力

各教科における「思考力・判断力・表現力」の育成の現状と課題

現状

知識を増やす学習に重点が置かれ、身に付けた知識・技能を活用し、定着させる学習の機会が十分ではない。

身に付けた知識から根拠が明らかな課題に対しては解答や意見を示すことができるが、知識・技能を課題解決のために結び付け、筋道立てて考え、根拠に基づいて結論を出し、根拠を示して説明するという思考・判断・表現のプロセスを経た解答や意見を示すことが苦手である。

課題

身に付けた知識・技能を活用し、思考・判断・表現のプロセスを経た解答又は意見の表明を行う学習活動を意図的に行う必要がある。

国語部会主題

意見の交流を通じて自分の考えを深め、根拠を明確にして表現する力を高める授業の在り方について

仮　説

○　自分の考えについて、根拠や論拠、理由を明確にする学習活動を設定することによって、筋道を立てて考え、根拠に基づいて結論を出す力を高めることができる。

○　自分の考えや根拠に対して他者からの批評を受けることによって、自分の考えを深め、出した結論について根拠を示して表現する力を高めることができる。

具体的方策

○　グループワークや発表活動などの言語活動を充実させることを通して、根拠や論拠、理由を明確にしながら思考・判断・表現する学習の機会を設定する。

○　論理的な文章の構成や展開を確かめ、自分の表現に役立てる学習活動を取り入れる。

○　様々な視点から意見を出し合えるような題材について、根拠や論拠、理由を明確にしながら思考・判断・表現する学習活動を展開する。

検証方法

学習の過程に応じたワークシート、相互評価、活動の様子の観察等について、検証授業の前と後の記述内容や量、活動の姿勢や発言内容等の違いから研究の成果と課題について検証する。

2　実践事例

(1)　実践事例

科目名	国語総合	学年	１学年

1　単元（題材）名、使用教材（教科書、副教材）

単 元 名：根拠を明確にしながら、表現する力を高める。

使用教材：「水の東西」山崎正和　（『高等学校　改訂版　国語総合』第一学習社）

※　本事例では、自分の考えをより説得力のある文章にまとめられるように、優れた表現に接してその条件を考え、自分の表現に役立てる学習活動を取り入れた。教材として「水の東西」を取り上げたのは、「読むこと」の指導のためではなく、「書くこと」の指導において論理の展開や構成を学ぶためである。

2　単元（題材）の指導目標

・　論理の構成や展開を工夫し、論拠に基づいて自分の考えを文章にまとめる姿勢を身に付ける。（関心・意欲・態度）

・　グループワークや発表活動などの言語活動を通して自分の考えを深め、明確な根拠に基づいて表現する力を身に付ける。（書く能力）（「Ｂ書くこと」の（１）のイ）

・　文や文章の組立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かにする。（知識・理解）（「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」のイの（イ））

3　評価規準

ア　関心・意欲・態度	イ　書く能力	ウ　知識・理解
根拠に基づいて自分の考えをまとめ、論理的に展開された文章を書こうとしている。	根拠に基づいて自分の考えをまとめ、論理的に展開された文章を書いている。	文や文章の組立て、語句の意味、用法及び根拠に基づいた文章の書き方を理解している。

4　単元（題材）の指導計画（６時間扱い）

時間	学習内容	学習活動	評価規準（評価方法）
1	自己の意見をまとめる。 ・相互評価 ・「根拠」を示すこと	・「テレビの良さ」について４００字から６００字程度でワークシート①に自分の意見をまとめる。 ・４人でグループを作り、意見を読み合う。ワークシート②にそれぞれの意見について評価する。 ・グループで、それぞれが一番分かりや	

	の重要性を確認する。	すかったと思うものを挙げ、理由をメモする。その結果から分かりやすい意見を書くために大事なことは何か考える。 ・「論理的な文章を書く（根拠に基づいて自分の考えを文章にまとめる。）」という今後の学習目標を確認する。	
2	論理的に考えることを学ぶ。〈1〉 ・「根拠」の妥当性と客観性 ・「根拠」を裏付けるもの	・ワークシート③「学校の制服はあった方がいい」という意見に対して賛成か反対か、自分の考えを根拠を示して短文でまとめる。 ・ワークシートに書かれた例文を読み、根拠の内容について検討する。 ・自分の示した根拠を振り返り、妥当性、客観性があるか確認する。 ・ワークシート④について、「根拠」に説得力をもたせるためには「裏付け（具体例、説明、引用など）」が必要であることを確認する。 ・自分が指定された地区の町内会長だと仮定して、コンビニエンスストアを誘致する場所に関する意見を、「根拠」「裏付け」を示してまとめる。	ウ（記述の点検）
3	論理的に考えることを学ぶ〈2〉 ・グループワーク ・根拠をより説得力のあるものにする。 ・発表 ・まとめ	・４人グループを作り、前時にまとめた意見について互いに読み合い、一番説得力があると思うものを選ぶ。 ・選んだ意見を基に、更に説得力をもたせるためにグループで話し合い、ワークシート⑤に書き込む。 ・グループでまとめた意見を発表する。 ・それぞれのグループの発表をワークシート⑥にメモを取りながら聞き、最も説得力のある意見を出した班を選ぶ。 ・意見、根拠、裏付けについて整理する。	イ（記述の点検）
4	論理的な意見の述べ方を学ぶ。〈1〉 ・「水の東西」の学習 ・構成と対比	・「水の東西」（山崎正和）を読み、ワークシート⑦に各段落の内容をまとめながら、段落構成と対比に着目する。 ・「水の東西」を参考に、「テレビの良さ」	ウ（記述の点検）

	・グループワーク	について述べるための材料として対比できるものを考える。 ・　グループで、各自が考えた材料を出し合い、意見文を書くための素材にできるように考えを磨く。	
5	論理的な意見の述べ方を学ぶ〈2〉 ・自己の意見をまとめ直す。	・　ワークシート⑦に意見文を書くための構成メモを作成する。 ・　ワークシート⑧に、再度「テレビの良さ」というテーマで、対比を使って意見文を書く。自分の考えや根拠を必ず入れ、構成に気を付けて書く。	イ（記述の確認）
6 本時	意見文を読み合い、優れた表現を自分の意見文に生かす。 ・グループワーク ・相互評価 ・自己評価 ・感想記入	・　グループで意見文を読み合い、ワークシート⑧の下段に評価を書き込む。 ・　ワークシート①と⑧を読み比べ、ワークシート⑨に自己評価を書き込む。 ・　他の人の意見文と評価を読み、自己評価と合わせて自分の文章の改善点をまとめる。	ア（記述の分析）

5　本時（全６時間中の６時間目）

（１）本時の目標

根拠に基づいて自分の考えをまとめ、論理的に展開された文章を書く姿勢を身に付ける。
（関心・意欲・態度）

（２）本時の展開

過程	時間	学習内容 学習活動	指導上の留意点	評価規準 （評価方法）
導入	5	・グループになる。	・　ワークシート⑧を返却し、本時の活動の趣旨説明を行う。	
展開①	20	・各グループで意見文を読み合い、班員の作文を評価する。	・　評価の着眼点は「根拠」「裏付け」「対比」「構成」とし、良い点と改善点を記入させる。	ア（記述の分析）
展開②	15	・ワークシート①と⑧を読み比べ自己評価を行う。 ・自分の文章の改善点をまとめる。	・　ワークシート①を返却して、ワークシート⑨を配布する。 ・　他者からの評価を踏まえること、これまでの学習のポイントを振り返ることを指示する。	
まとめ	10	・今単元の学習について振り返る。	・　これまでのプリントを確認させ、反省と感想を記入させる。	

6　本時の振り返り

(1)　前時までの学習活動について

根拠の重要性、根拠の裏付けの必要性、論理的な文章構成の重要性をそれぞれの段階に応じたワークシートを使って学習してきた。記述状況や取組の様子から、生徒が意欲的に各段階の学習に取り組んでいる様子がうかがえる。

その結果として、ワークシート⑦⑧では根拠やその裏付け、構成などについて具体的にメモし、そのメモに基づいて記述する姿が見られるようになった。また、教科書の「水の東西」のページを繰りながら記述する様子も見られ、前時までの学習活動の意味をおおむね理解した上で本時に臨んでいるものと評価できる。

(2)　グループでの相互評価について

ワークシートに評価項目を示したことで、論理的な文章を書くために必要な要素を、他者の文章を評価しながら再確認していた。生徒の感想には「自分とは違う考え方、書き方、表現方法を知ることができた」という記述が見られるなど、他者の意見文を読み、他者からの評価を受けることにより、自分の意見文を客観視することができた。全６時間同じグループでの活動のため、自分の意見文だけでなく、班員の文章の変容をも感じながら相互評価をしていた。また、「他の人のよい点を学んで、これからに生かしたい」など、相互評価が刺激となって今後の学習への意欲を見せる生徒の感想が数多く見られた。

(3)　自己評価について

自分の意見をただ漠然と述べていたワークシート①と比べて、ワークシート⑧では自分の意見が分かりやすく整理され、「根拠や構成に気を付けて書いた」という自己評価が見られるなど、文章の構成を意識することができるようになったと実感する生徒が多くいた。自己の文章の変容と他者の文章との比較を通して、それぞれの生徒が自分の課題と改善点を挙げられるようになった。自分の考えや意見を相手に伝える文章にするために必要な観点や構成について理解したものの、文章表現や内容の深化について課題があると述べる生徒が多く見られた。

(4)　本時の検証

上記のとおり、生徒には、これまでの段階的な学習の意味や相互評価の意味が意識されており、本時の学習活動は、論理的に自分の考えを文章にまとめ、優れた表現を自分の文章に生かすという活動として有効であった。

7　ワークシート等の分析

(1)　生徒の感想等

今回提案した単元の、最後のワークシート⑨において、相互評価と自己評価の他に自分の文章の改善点と、今回の単元の学習についての感想と反省を記入させた。その内容を教員側でまとめたものを以下に紹介する。

ア　「意見の交流を通じて自分の考えを深める」ことについて

(7)　交流の場面について

- これからこういうことがあったら自分の意見をしっかり伝えていきたい。
- 最初は自分の文章を他人に読まれるのが恥ずかしかったが、勉強していくうちに自

信が付き恥ずかしくなくなった。

・　地図を使ったグループワークが楽しかった。友達の意見を聞き、自分はもっと想像力を付けなければいけないと思った。

(ｲ)　考えの深まりについて

・　他の人の文章を読むことで、自分とは違う考え方、書き方、表現方法を知ることができ面白かったし勉強になった。

(ｳ)　伝えることについて

・　自分ではよい文章だと思っていても、他の人から見ると構成などがしっかりできていないため読みにくいということをグループワークを通して分かったので良かった。

・　１時間目は嫌な授業だと思っていたが、だんだん楽しくなっていた。自分の意見をまとめて文章にすることは難しいと思っていたが、慣れてくるときちんとした文章にできる。もっと練習すれば良いものが書けると思った。

イ　「根拠を明確にして表現する」ことについて

(ｱ)　書く内容の明確化について

・　自分の意見というものがはっきりしていなかったと思うので、まず自分の考えをしっかりもつことから文を書く力を付けたいと思う。

・　与えられている課題と自分の文章の内容がずれていないことも大切だと知った。

(ｲ)　根拠の明確化について

・　この授業を通して、具体例を挙げたり対比などをしたりして説明をすることが大事なことだと分かった。今までの自分は大した理由もなく感覚的に自分の考えを述べていたが、これからは理由や経験を入れながら説明することができるようになった気がする。友達と話す時も理論付けながら話して納得させてやろうと思う。

・　この授業で文章を構成し、裏付け、根拠などを書くことで、文章の内容に説得力が増し、主観的から客観的になるということが分かり、今までより分かりやすく読みやすい文章が書けるようになった。

(ｳ)　構成について

・　構成を考えたので、文章を引き延ばすために後から付け加えることもなく、意見を一つに絞ることができた。

・　同じ題でも人それぞれ内容は異なり、様々な説得の仕方があるということを知った。

・　ワークシート①とワークシート⑧を見て、⑧の方がいいと思ったので、②～⑦が役に立ったのかなと思った。

・　本をたくさん読んで参考にしながら、もっと文章を書く練習をしていきたい。

(2)　ワークシートや生徒の活動等の分析

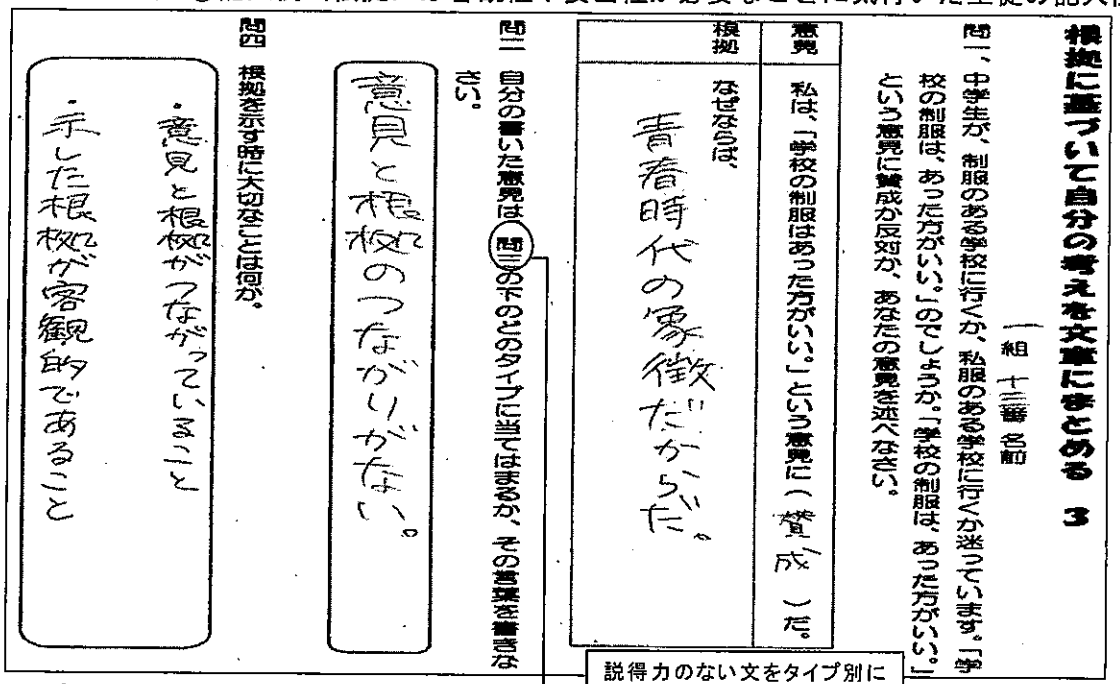
今回の単元では、ワークシートにより段階的に学習できるよう工夫した。まずステップⅠとして論理的に考えることを学ぶために、根拠を示すことの重要性、根拠の妥当性と客観性、そして挙げた根拠の説明となる裏付けについて学習できるものを考えた。次にステップⅡとして論理的な意見の述べ方を学ぶために、文章構成や展開、対比について考えさせるものを、そしてステップⅢとしてこれまでの学習を活用し、更に優れた表現について

考えられるものをそれぞれ用意した。各段階におけるワークシートと生徒の活動の状況を分析し以下のようにまとめた。

ア　根拠

「学校の制服があった方がいい」という意見に賛成か反対か、意見を述べるワークシート③では主観的で感覚的な根拠を述べていた生徒が、次のワークシート④では根拠の客観性と妥当性を意識して意見を述べようと努力している姿が多く見られた。また３時間目のグループワークの際には、「意見と根拠のつながりが分かりにくい」とか、「その根拠は主観的だ」などという指摘も聞かれた。大部分の生徒が、ここで確認した根拠の客観性と妥当性を考える視点を意識して最終的にワークシート⑧に取り組んでおり、根拠を示す時に大切なことについて考えさせるワークシート③は大変効果的であった。

ワークシート③記入例（根拠には客観性や妥当性が必要なことに気付いた生徒の記入例）


根拠に基づいて自分の考えを文章にまとめる　3

（　組　十三番　名前　）

問一、中学生が、制服のある学校に行くか、私服のある学校に行くか迷っています。「学校の制服は、あった方がいい。」のでしょうか。「学校の制服は、あった方がいい。」という意見に賛成か反対か、あなたの意見を述べなさい。

意見　私は、「学校の制服はあった方がいい。」という意見に（賛成）だ。

根拠　なぜならば、青春時代の象徴だからだ。

問二　自分の書いた意見は問三の下のどのタイプに当てはまるか、その言葉を書きなさい。

意見と根拠のつながりがない。

問四　根拠を示す時に大切なことは何か。

・意見と根拠がつながっていること

・示した根拠が客観的であること

説得力のない文をタイプ別に学ぶ問三が別にあります。

イ　裏付け

今単元では根拠と裏付けを分けて考えさせる学習活動を計画した。ワークシート④において、意見についての根拠は簡潔にまとめさせ、根拠の詳しい説明となる部分を裏付けとし、具体例や体験談等も含めて考えさせた。

生徒の多くは具体的な事柄について考えることはできるものの、一つ一つの具体的な事柄を抽象化してまとめることがどのようなことなのか理解していない様子であったが、授業者が実際に書かれたワークシートを見ながら根拠と裏付け、抽象と具体について整理できるよう助言を加えていった。

ワークシート④の課題（13ページ「ワークシート④記入例」参照）について、初めは意見の根拠として「高校があるので高校生がお弁当を買えるから」としていたものを、「多くの人にとっての利便性を最も重視したため」と改め、その根拠を支える裏付けとして「高校が近く、多くの高校生が利用しやすい」や「大通りに面しているので人の流れがある」など、具体的説明を詳しく述べられるようになった。また、この課題に関するグループワ

ーク、各班の発表を聞いて、意見は同じでも自分や自分の班とは異なる根拠や裏付けが考えられることに興味を示し、他人の発表を、メモを取りながらしっかり聞くなど、この活動に意欲的に取り組んでいた。

この活動で根拠を簡潔にまとめることができるようになり、意見文を書き直すワークシート⑧において、序論でまず自分の意見と根拠を端的に述べ、本論でその説明を展開するという構成を用いる生徒が多くなった。

ワークシート④記入例（意見・根拠・裏付けの関係を理解した生徒の記入例）

根拠に基づいて自分の考えを文章にまとめる　4

2組　7番　名前

問一　根拠に説得力を持たせるために何が必要か。

（どういってる）裏付け

説明　解説
具体例
体験談
引用　など

問二　あなたが、配布された街（地図）の指定された地区の町内会長だとしたら、街のどこにコンビニエンスストアを誘致しようと考えますか。あなたの考えを述べなさい。

意見	根拠	裏付け
大学とオフィス街の間	大学生や働く人など利用者が多く見込めるから。	なぜなら、オフィス街と大学の間につけることによって大学生も働く人、両方の人が使うことができるから。また、オフィス街に行っている人は夜中に帰る可能性もあるから24時間営業のコンビニがあることによって何時に帰っても寄ることができる。

ウ　構成と対比

ワークシート①を相互評価するワークシート②において、「分かりやすい文章には比較・対比があった。」という生徒からの発言を取り上げて確認していたこともあり、対比の構造が明確である教科書教材「水の東西」を使用して構成と展開を確かめ、その対比の構造を模倣して文章を書くという活動へのつながりは無理なく自然なものとなった。「水の東西」を読みながらワークシート⑧に取り組む生徒が各クラスで見られ、ワークシート⑦の構成メモを基に、対比を用いて本論を展開しようと努力していた。

しかし、最初の検証授業ではワークシート⑦の対比するものを挙げる練習が、自分の意見を述べるのにふさわしい対比を考えることにつながりにくいという課題を残したため、ワークシート⑦を改善し、次の検証授業を行った。新しいワークシート⑦では、自分の意見にふさわしい対比を挙げ、それを使って構成メモを書くものとし、対比できるものを考える練習に、より意味をもたせることができた。

「ワークシート①ではなかなか書けずに短文になってしまったが、ワークシート⑧では対比と裏付けを意識して書こうとするだけで文章が書きやすくなって自然と長くなった」と感想を述べている生徒がいたように、自己の意見をまとめ直す5時間目の活動ではどの生徒も一斉に鉛筆を走らせていた。

構成を整えることに捉われ、記述内容が深まらない場合があるという課題は残ったものの、構成が整った文章に変わったり、記述量が増えたりした生徒が大部分であった。記述量が減った生徒は、「無駄な文章がなくなってすっきり分かりやすくなった」と自己評価していた。ワークシート①と⑧を比較して自分の文章が読みやすくなったことを確認し、学習の成果を実感していた。

ワークシート⑦記入例（修正前）

問三　水の果西を参考に「○○と△△」というように対比するものを考え、その違いを考えてみよう。（「…水」「…食」のようにすべて揃わなくてもよい。）

例	対比1	対比2	対比3
和食 洋食	はさむ（箸）食 さす（フォーク）食	淡泊な食　素材 濃厚な食　ソース	目で楽しむ食 量を楽しむ食
和室 洋室	たたみ フローリング	引きとびら 開きとびら	
テレビ （　新聞　）	見る， 読む	動画 写真	
テレビ （ラジオ）	見る 聞く	映像 映像なし	コンセント 電池
テレビのみ			

問四　他の人が考えた対比を説明を聞きながら書き込もう。

例	対比1	対比2	対比3
バド テニス	軽いラケット 重いラケット	シャトル ボール	せまいコート 広いコート
洋式トイレ 和式トイレ	すわる しゃがむ	洋風 和風	つかれない つかれる
テレビ （　　）			
テレビ， （　　）			
テレビのみ，			

挙げた対比の中から、自己の主張にふさわしいものを選び出している。

ワークシート⑦記入例
（修正後）

問三　「テレビの良さ」について述べるために対比できるものを考えなさい。

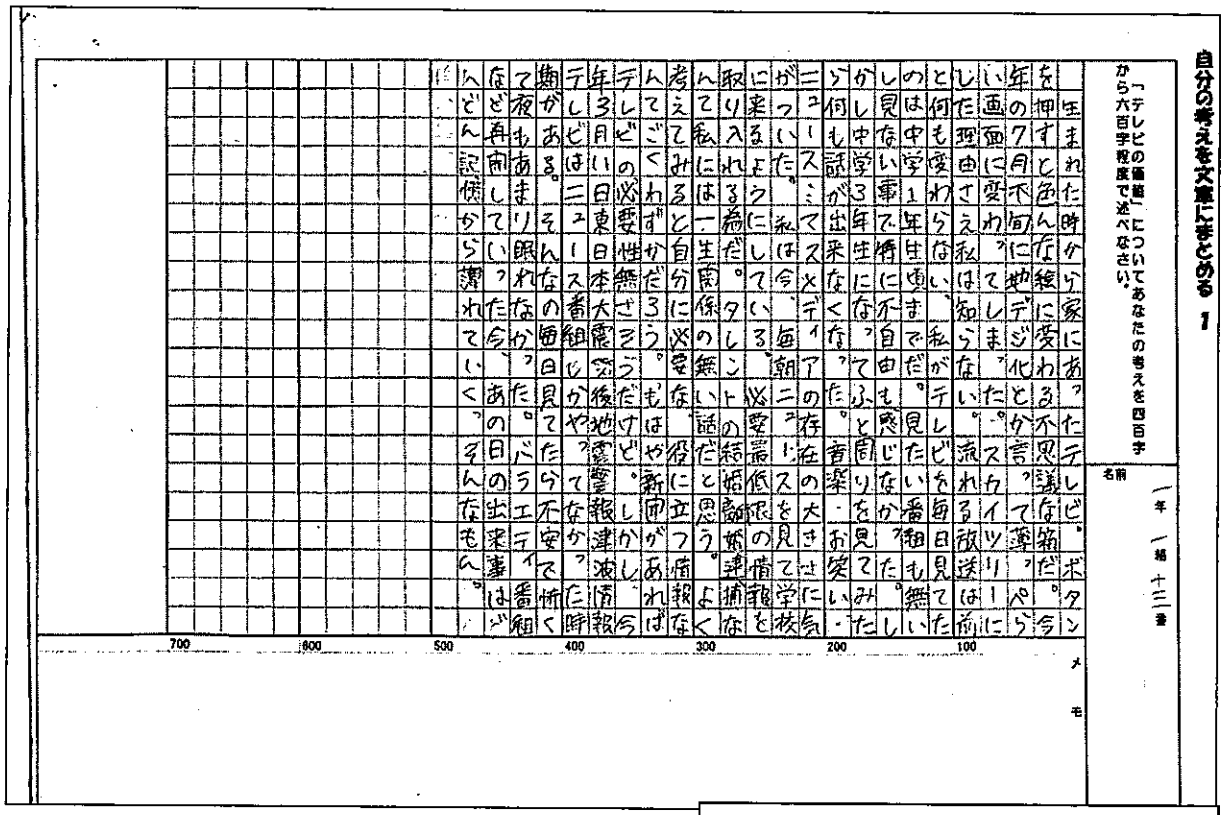
	対比	対比	対比
テレビ （新聞）	見る 読む	時間がかからない 時間がかかる	伝わりやすい 伝わりにくい
テレビ ラジオ	見る 聞く	想像がつきやすい 想像力がつく	画面だけでも雰囲気が伝わる 曲を聞ける
テレビ 新聞	音声でる でない	映像 （無）（有）	いつでも最新情報がえられる 朝・昼・夕方の情報が分かる

使ラヤツ

問四　「テレビの良さ」を三段構成（序論、本論、結論）で書くとするとどうなるだろうか。次の表に書き込んでみよう。

序論	自分の意見 根拠	テレビは映像だけでなく音声もでるので目と耳の両方で情報を得ることができる。 伝わりやすい　たくさんのことを学べる
本論	具体例 ↓裏付け 対比の構造を入れよう	テレビ↓音声が出る　映像で　いつでも情報取得可 アレビや新聞で比べてみると、 新聞↓出ない　写真　朝・昼・夕方の情報
結論	自分の意見のまとめ	というわけでテレビというのは分かりやすく伝わりやすい便利なもの。

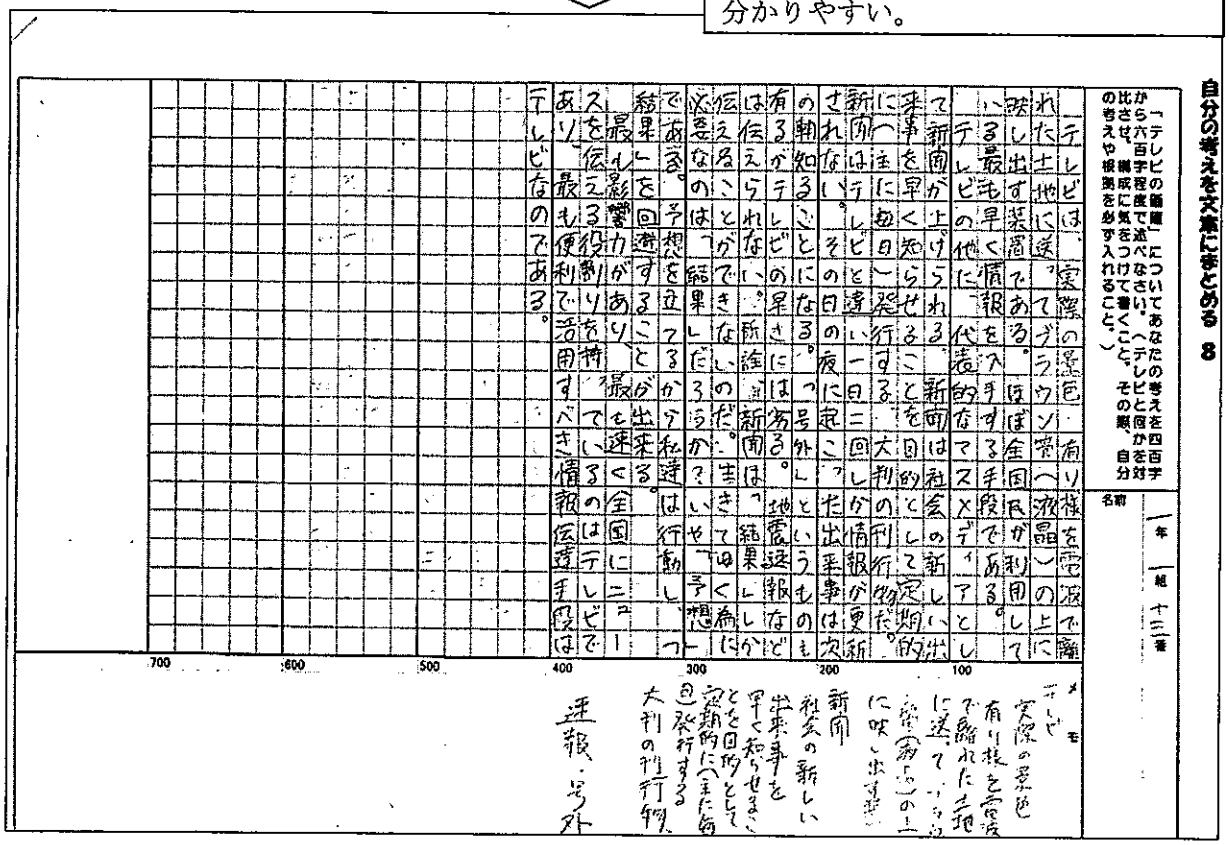
ワークシート①記入例



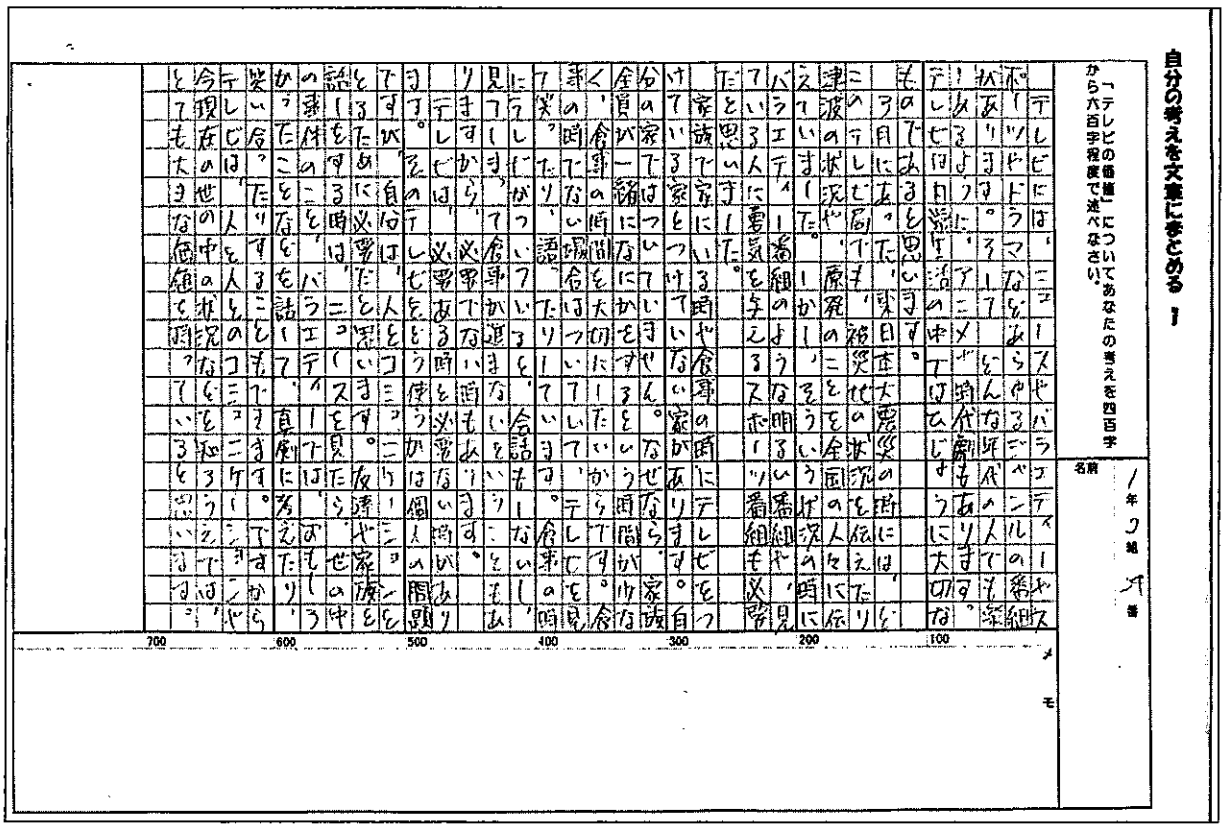
①は段落が構成されておらず、主張も一方的である。

⑧は、段落構成が意識され、主張も分かりやすい。

ワークシート⑧記入例

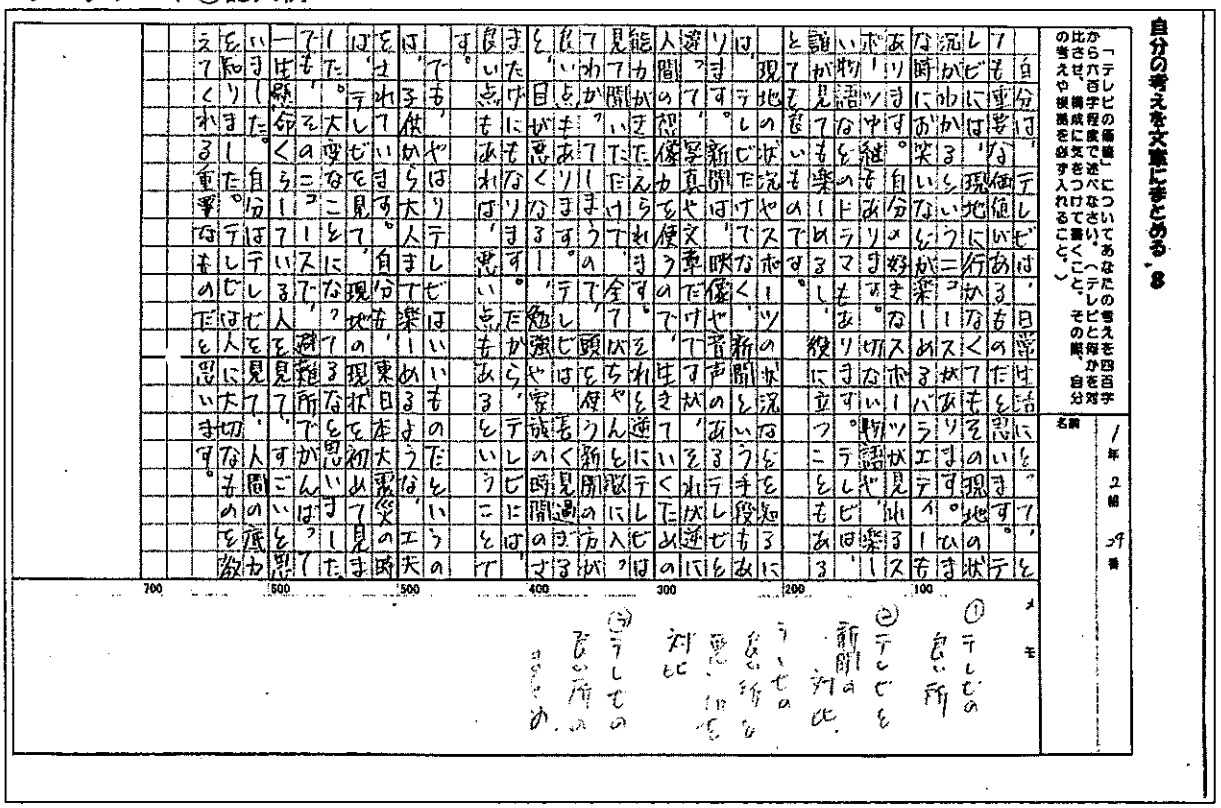


ワークシート①記入例



①に比べて⑧では言いたいことが整理されている。

ワークシート⑧記入例



8　今回の実践における単元としての成果と課題

(1)　教材・題材について

教科書教材「水の東西」は、論理的文章の構成や展開、対比の構造を捉えやすく、教材を自分の表現に役立てることができていた。授業で評論文を扱う際に、内容読解に重きを置く傾向があるように思うが、今回の単元のように内容読解ではなく構成や展開を確認するという思い切った使用もでき得る教材である。

その他、様々な視点から意見を出し合えるような題材としてワークシート④⑤に、様々な自由な意見をもつことができるテーマを設定した。模範的意見を述べようと考えるのではなく、根拠に基づいて判断した意見をもってほしいと考えた。グループワーク、発表も含め、生徒が楽しみながら意欲的に取り組める題材であった。

(2)　授業の形態・手法について

ワークシートを使用しながら段階的に論理を構築できるように導くことができた。グループワークや発表活動を通して、他人の意見や視点を知ったり、優れた文章構成や表現に触れたりして、自分の文章の改善点を客観的に捉えることができるようになった。

「個人作業」と「グループ作業」を組み合わせて、自分の意見をより説得力のあるものに高める活動となった。今回は、１グループの人数は４人とした。意見文を読み合い、活発な意見交換するのに適当な人数編成であった。

(3)　評価の工夫について

それぞれの活動の中で相互評価を行ったことで、自分の意見を深める活動と、他者の意見に興味をもって読み込む活動ができた。評価の観点を設け、生徒同士で相互にその観点で他者の意見文を読むという活動は、説得力のある文章を書く上で必要な観点を身に付けることにつながり有意義であった。

また、他者の目を意識することは客観的に文章を構成する意識につながった。相互評価で得られた視点は自己評価の視点にもつながった。

(4)　結果に対する考察

ワークシートの工夫や変化のある授業形態など授業展開に動きがあり、生徒は飽きることなく意欲的に取り組むことができた。今回は「書くこと」を指導目標とした取組であったが、論理的な展開を意識して書くことは論理的に「読むこと」にもつながり、今回の学習活動の成果は今後の学習にもつながるものと思われる。また、グループでの話合いや発表などの伝え合う活動は生徒のコミュニケーション能力を刺激した。適切な表記や表現についての学習活動は今単元の実践事例だけでは不十分であるため、系統的な学習を計画する必要がある。

今単元では、「水の東西」の構成を自分の文章に利用できるようにという意図で対比を意識させたが、自分の論の構成を考える活動と指導に時間をかけていない。そのために、自分の意見を述べるのにふさわしい対比をなかなか挙げられないまま、対比の構造にこだわりすぎて内容が表面的になる課題が残った。意見文を書く前の構成メモ段階の指導を計画すれば、より力が付くものと思われる。

(5) 生徒の変容とねらいの達成について

ワークシートの分析から、生徒が楽しみながら課題に取り組み、自分の変容を実感し達成感を得ている様子がうかがえる。もともとの語彙力や表現力などの能力差はあるが、どの生徒も個々に伸びが見られ、ねらいはおおむね達成されていた。これまで文章を書くことが苦手で自信をもてないでいた生徒が、分かりやすい文章に必要なものと構成の方法について学んだことで、文章を書くことを嫌がらず取り組むようになり、さらに、もっとうまく書けるようになりたいという意欲を示したことは大きな成果である。

Ⅵ 研究の成果

1 仮説の検証

(1) 自分の考えについて、根拠や論拠、理由を明確にする学習活動を設定することによって、筋道を立てて考え、根拠に基づいて結論を出す力を高めることができる。

今回の実践事例では、まず生徒に、課題について自分の意見をまとめる学習活動を行わせている。この学習活動によって、中学校までに学んできた内容の定着度を確認するとともに、ここで書かれたものを、授業後の生徒の変容を見るための比較材料とした。

生徒は、自分がまとめた意見をグループで検討し、「分かりやすい意見を書くために大事なことは何か」ということについて、「根拠を示すこと」という内容（又はそれに近い、理由・比較・具体例・体験談などを示すこと。）を導き出している。生徒は、中学校までに「根拠を明らかにして意見を述べる」ことや「論理の展開を工夫して書く」ことを学んでいるので、これらの大切さは分かっているはずである。しかし、中学校でこうした内容について授業で学んだり、自分で文章を書いたりした経験があっても、実際に筋道立てて考え、根拠に基づいて結論を出し、根拠を明らかにして説明するというプロセスは、繰り返し実践しないと身に付かない。

実践事例の中では、こうした学習活動を繰り返し取り入れることによって、生徒にこのプロセスを意識させることができた。短い文章で意見と根拠をまとめる学習活動に取り組むことで、意見と根拠のつながりが明確になり、生徒にとっては自分の考えが筋道立ったものであるかどうかが確認しやすかったようである。

(2) 自分の考えや根拠に対して他者からの批評を受けることによって、自分の考えを深め、出した結論について根拠を示して表現する力を高めることができる。

今回の実践事例では、「根拠の妥当性と客観性」や「根拠に説得力をもたせる具体例や説明、引用など」について検討する学習活動を取り入れた。生徒はこれらの活動を通して、自分の考えを支える根拠は、ただ示せばいいというものではなく、どういった根拠を示せば自分の考えは相手に説得力をもって伝わるのかということに気付くことができた。グループワークでは、生徒にとって身近な話題を取り上げることで、それぞれの考えの根拠の妥当性や客観性について互いに検討しやすくなり、活発な話合いが行われた。グループワークを終えた生徒の感想からも、自分の意見の根拠が妥当なものであるのかを検討する大切さや、より説得力のある意見を述べるためには何が必要なのかということについて気付

くことができた様子がうかがえた。

こうしたことに気付くためには、個人での学習だけでは限界がある。グループワークを通して他者から批評を受けることにより、自分の考えを深めることができたと考えられる。他者の視点に学びつつ、自分の考えを確かなものにできたようであった。

実践では、「水の東西」を使って対比の構造を学び、それを模倣しながら自分の表現に役立てることとした。ここで注意しなければならないのは、取り上げる教材はあくまでも論理の展開と構成を参考にするためのものであって、「読むこと」の教材としては取り扱わないということである。評論教材を扱うからといって、ここで詳細な読解を始めてしまっては、この単元の指導目標は達成されない。もちろん、年間の指導と評価の計画の中で、本単元を「読むこと」の単元の後に位置付け、そこで扱った教材を生かすことは可能であるが、単元の指導目標を見失うことのないように十分に注意したい。

生徒は「水の東西」本文の論理の展開や構成を参考にすることで、対比の構造を自分の表現に生かすことができるようになった。対比する内容を考える段階でグループワークを取り入れたことにより、自分だけでは気付かなかった視点に気付く生徒もいた。実践の終わりには、書き上げた意見文をグループで読み合い、互いに批評させることによって、自分の考えを深めることができた。授業後の生徒の感想からは、他の人の文章を批評するとはどういうことなのか、批評する観点に気付いた様子が読み取れた。また、他者から批評を受けることによって、自分の文章に足りない点に気付いただけでなく、自分では気付かなかった自分の文章の良さや、今までの学習を生かせている点を知ることができたという喜びが記されていた。

本事例では、（１）にも述べたとおり、１時間目と６時間目において、同じ課題で自分の意見をまとめさせている。二つの意見文を比較してみると、６時間目の意見文では根拠の妥当性や客観性、論理展開の工夫という点において、生徒の変容が見られた。こうした生徒の変容の様子からも、本研究の仮説が実証されたことが示唆される。

２　実践事例の活用について

今回の研究における実践事例を活用するために、(1) 年間の指導と評価の計画との関係、(2) 年間指導計画の例、(3) 他の科目における指導、(4) 言語活動と教材との関連、(5) 言語活動と生徒の実態との関係、の５点から本実践事例の「汎用性」について述べる。

(1)　年間の指導と評価の計画との関係

今回の実践事例では、単元の指導を６時間扱いとして計画している。授業も６時間を連続して扱っているが、これを指導内容に応じて１時間から３時間程度のまとまりに分けて、年間の指導と評価の計画の中に配置することも可能だと考える。

本事例は、「２実践事例（２）ワークシートや生徒の活動等の分析」でも述べているように、次の３段階での学習による単元構成になっている。

ステップⅠ：論理的に考えることを学ぶために、根拠を示すことの重要性、根拠の妥当性と客観性、挙げた根拠の説明となる裏付けについて学習する。

ステップⅡ：論理的な意見の述べ方について学ぶために、文章構成や展開、対比について

考える。

ステップⅢ：これまでの学習を活用し、更に優れた表現について検討する。

そのため、教材やワークシートも、各ステップのまとまりを意識して作成した。

以上のことから、６時間の内容を連続して一単元として扱うことはもちろんのこと、例えば、次のように年間指導計画の中に単元を分割して配置することも考えられる。

ステップⅠ：年間指導計画の初めの方に位置付けて、中学校での学習内容の定着度合いを測る。

ステップⅡ：文章の構成が参考になるような評論を扱った後に位置付けて、優れた表現を自分の表現に生かす。

ステップⅢ：年間指導計画の終わりの方に位置付けて、書くことのまとめとする。

各学校の実態に応じて、前後の学習内容との関連付けた指導計画を立てることで効果的な指導ができるものと考える。

(2)　年間指導計画の例（ステップⅠ～Ⅲを組み込んだ例）

	単元名	単元の目標	単元の評価規準	学習活動	教材等
一学期	Ｃ叙述に即して読む	「Ｃ読むこと」の（１）のア	文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読んでいる。	語句や表現に注意しながら、随想を読む。	随想など
	Ｂ随筆文を書く	「Ｂ書くこと」の（１）のア	文章の形態や文体、語句などを工夫して書いている。	テーマを決めて、自らのものの見方や考え方を文章にまとめる。	ステップⅠ
二学期	Ｂ定型文を書く	「Ｂ書くこと」の（１）のウ	相手や目的などによって、適切な表現の仕方を考えて書いている。	相手や目的に応じた語句を用いて、手紙や通知文を書く。	文化祭の通知文など
	Ｃ内容を的確に読む	「Ｃ読むこと」の（１）のイ	文章の内容を叙述に即して的確に読み取っている。	評論文の叙述に即して、内容を的確に読み取る。	評論文など
	Ｂ論理の構成を工夫して書く	「Ｂ書くこと」の（１）のエ	優れた表現に接してその条件を考え、自分の表現に役立てている。	評論文の構成や展開の仕方を自分の表現に生かして書く。	ステップⅡ

三学期	C構成を確かめながら読む	「C読むこと」の（1）のエ	文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価している。	評論文の構成や展開を確かめながら、書き手の意図を捉えて読む。	評論文など
	A討論する	「A話すこと・聞くこと」の（1）のウ	相手の示す根拠の適否などを確かめながら、考えを相対化して話し合っている。	相手の立場や考えを尊重して話し合う。	
	B意見文を書く	**「B書くこと」の（1）のイ**	**論拠に基づいて自分の考えをまとめ、論理の構成や展開を工夫して書いている。**	**自分の意見を論理の展開を工夫しながらまとめる。**	**ステップⅢ**

(3)　他の科目における指導

今回の実践事例は「国語総合」で実施したが、「根拠を明確にして表現する力を高める」という目標は国語総合に限ったものではない。そのため、各科目でこの目標についてどのように取り組むかを整理し、系統立てて指導する必要がある。

例えば、「現代文B」の指導事項のエには「目的や課題に応じて、収集した様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の考えを効果的に表現すること。」とある。作成した資料を活用して、自分の考えがよく伝わるようにするためには、論拠を明示するなどして分かりやすく表現することが求められる。

また、「国語表現」の指導事項のイには「相手の立場や異なる考えを尊重して課題を解決するために、論拠の妥当性を判断しながら話し合うこと。」とある。今回の実践事例でも取り上げたように、自分や相手の意見の根拠となる事実、判断のよりどころ、話の筋道の妥当性について、不断に判断させていくことが必要である。

以上のように、「国語総合」以外の選択科目においても、各科目の性格や特色に応じて、「根拠を明確にして表現する力」を高められるような指導を継続して行うことで、こうした力が生徒に確実に定着すると考えられる。

(4)　言語活動と教材との関連

今回の実践事例では、ステップⅠ（1～3時間目）の学習において、生徒が身近に考えられるようなテーマを提示した。ここは自分の考えと根拠を短文でまとめ、根拠の内容について検討する時間なので、まずは生徒が自分の意見をもてるようなテーマを設定する必要がある。また本事例では、様々な視点から意見を出し合えるような題材も取り上げている。「Ⅰ研究主題設定の理由　3主題設定の理由」の部分でも述べたように、これまでの授業者側の課題として、模範解答に対する正解を評価してきた経緯がある。そのため、生徒も「正解」を求めることにこだわり、自分の考えと根拠をよく吟味しないままでいることが少なくない。今回は、様々な考え方ができる題材を取り上げることで、まず生徒が自分の

意見をもち、その根拠についてよく考えるということに指導の重点を置いた。題材の内容については、実践事例で取り上げたようなものばかりでなく、生徒の実態に合わせて様々な内容が考えられる。生徒が自由な意見をもてるような題材を選定したい。

ステップⅡ（４時間目）の学習においては、論理の展開と構成の参考にするために評論教材を用いた。実践事例では、「水の東西」を取り上げていた。この教材を選定した理由は、対比の構造がはっきりしていて生徒が模倣しやすいことと、多くの国語総合の教科書に採録されているため様々な学校で応用可能であることが、本研究の汎用性という側面からも適切だと考えたからである。

今回は、この教材を用いて対比の構造を参考にさせたが、このほかにも様々な教材を取り上げることが考えられる。「（１）年間の指導と評価の計画との関係」でも述べたように、年間の指導と評価の計画との関係から、「読むこと」の単元で評論教材を扱った後に本単元を位置付けて、そこで取り上げた教材を参考にさせるなどの工夫もできる。

(5)　言語活動と生徒の実態との関係

言語活動は、各学校の実態に合わせて設定された単元の目標及び指導事項に対して適切なものを取り上げることが求められる。それぞれの学力や生活環境など、生徒の実態に応じた配慮が必要である。

今回は生徒の実態が異なる学校で実践を行うことができた。しかし、学校によっては、用意した題材やワークシートでは生徒の理解が深まらなかったり、補足の説明を必要としたりした。また、逆に、生徒が、ワークシートの内容に縛られて考えを深めることを妨げられていると思われる場合もあった。こうした生徒の実態に触れ、本研究では題材やワークシートについて段階を分けて提示することや、補助的なワークシートを用意することの必要性を感じた。

特に手だてが必要な生徒について、その実態や個に応じた指導の必要性を感じた部分としては、以下の３点である。

ステップⅠ：中学校での学習を振り返り、根拠とは何であるか復習して、自分の考えの根拠を短い文章で挙げる練習を行う。

ステップⅡ：参考とする教材の構成や表現の特徴について、本文に線を引きながら丁寧に追って確認する。

ステップⅢ：ステップⅡの学習を踏まえて、改めて自分の考えを文章にまとめるために構成メモをしっかりと作って構成を考える。

上記のような「手だてが必要な生徒」とは逆に、自分の力で更に考えを深められる生徒については、細かい指示のあるワークシートを使うことで生徒の自由な思考を妨げることもあり得る。そのため、こうした生徒に対してはワークシートとして記入する枠だけを与えて自由に考えさせる、各自のノートにまとめ方も工夫させながら自分でまとめさせるなどの授業展開の工夫も考えられる。授業者が生徒の実態を正確に把握できずに必要以上に細かい指示を与えすぎることによって、生徒が自ら伸びる芽を摘んでしまうことのないよ

うにしたい。生徒の能力を適切に把握し、生徒の状況に応じて発展的な内容や探究的な内容の指導を工夫するなどの必要がある。

Ⅶ　今後の課題

1　系統的、横断的な指導について

根拠を明確にしながら表現する力を高めるという当初の目標を、高校３年間（又は４年間）の中で実現していくためには、各学校の実態に合わせながら国語科が主体となって指導計画を提示していく必要がある。まずは、国語科の授業計画について、今回のような試行的・研究的授業を含め、どのような指導事項をどのような言語活動でどのように年間指導計画上に位置付けていくかを各学校で検討する必要がある。

今回の実践事例では、対比の構造を扱っているが、年間を通じて扱う論理的な文章について、それぞれどのような文章構造であるのかを整理し、どのような順番で扱い、学んだ構造を活用して文章を書かせる機会をいつ設けるかを検討することが重要である。長い期間で予定を組み、学期単位、学年単位で意図的・計画的に授業を実施することで、生徒に大きな変容が見られると考える。

さらに、書かせた文章の内容を深化させるためにはどうしたら良いかを教えていくことも必要である。今回の実践事例では、文章構造にこだわり過ぎて内容が深化しない場合も見受けられた。あくまで、自分の意見を伝わりやすくするために、構造を工夫して文章を作成するのだということを生徒に理解させることが重要である。

調べた知識を裏付けとして挙げるだけでなく、意見に説得力をもたせるために、根拠や裏付けの内容として妥当かどうか検討し合ったり、自分で確認したりする機会を設ける必要がある。それ以外にも、図書室などを活用し、資料に当たらせ、より客観的な裏付けが書けるように調べ学習を行うことが考えられる。

調べ学習の時間をどのような場面で設定するのが最も効果的か、また、本の探し方や図書室の使い方など事前に生徒に与えなければならない知識が何であるのかを整理し、どのような本を調べればよいのかを生徒にアドバイスするための準備も必要である。司書教諭など他教員との連携も重要である。

また、国語科だけの指導にとどまるのではなく、他教科との連携も重要である。国語科がどのような言語活動をいつ行うのかを他教科に発信していく。それとともに、他教科がいつどのような言語活動を行うのか、どのような目標でどのような指導事項において行うのか、ということを知る必要がある。共通性のあるテーマや指導事項を教科の枠を超えて関連付けて指導すれば、そのテーマや指導事項について生徒の理解も深まり、主体的な学習への動機付けになると考える。

2　学習した内容の活用について

今回の実践事例では、意見、根拠、裏付け、文章構造を理解した上で、根拠の妥当性を高めた文章を書く方法を学ばせる「書くこと」の学習に重きを置いている。今後、今回学んだことが、「読むこと」の学習にも生かされていくと考える。今回の実践事例の中でも、他の生

徒の文章を読む際に、意見、根拠、裏付け、文章構造という観点を生徒はもつことができていた。他の文章を読む際にもこれらの観点は十分に生かすことができると考える。

また、自分の意見の根拠の妥当性を意識するということから、さらに他者の発する情報に触れる際に、根拠が妥当であるか考え、情報の信ぴょう性を判断できるような力を身に付けさせる学習につなげることができる。例えば、メディアリテラシー教育として、メディアの発信する情報の根拠と裏付けがしっかりとしているのか、根拠の妥当性は高いのかを、自分自身で思考し、判断できるような学習活動へと広げていくことが重要だと考える。他教科と連携して、国語科で学んだことを活用できるようにしていく必要がある。

3　国語科の果たす役割

新しい学習指導要領において国語科の果たす役割と責任は大変大きいものである。国語の力は全ての教科に通じる学習の基礎であり、また、その基礎の上に更に学習を積み上げていくための土台となるべきものである。授業で学んだことがその場限りの学習で終わってしまうのではなく、学びたいという意識をもたせることが、あらゆる教科に対して主体的、継続的に取り組む動機付けになると考える。

また、全ての教科・科目で言語活動の充実が求められており、そのために、国語科における言語活動を他教科に向けて積極的に発信するとともに、他教科における言語活動について情報の収集に努め、それらを関連付けるための中核的役割を担うことが期待されている。

国語科の教員である我々は、これらのことを常に意識しながら日々研さんに励まなければならないのである。

平成２３年度　教育研究員名簿

高　等　学　校　・　国　　語

学　校　名	課程	職名	氏名
都立片倉高等学校	全日制	主任教諭	大坪　志保
都立国立高等学校	全日制	主任教諭	○松原　志保
都立美原高等学校	全日制	主任教諭	滝澤　美恵
都立板橋有徳高等学校	定時制	教　諭	倉部　　康
都立千早高等学校	全日制	主任教諭	廣瀬　　愛
都立立川高等学校	全日制	主任教諭	小鷹　聡子

○　世話人

〔担当〕東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事　小林　　靖
東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
課務担当係長　加藤　和宏

平成23年度
教育研究員研究報告書

高等学校　国語

東京都教育委員会印刷物登録
平成２３年度第１８１号
平成２４年　３月

編集・発行　東京都教育庁指導部指導企画課
所 在 地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　（０３）５３２０－６８３６
印 刷 会 社　有限会社　シーダー企画